

30

20

JAPAN

10

TAMBA

5

4

3

2

1

0

茶葉後記 卷之二



門 79
卷 635
9

茶巡儀則卷之九

金の三戸



此稿第十九回内記す。金を取る。
爲り付の二回單なる。前の大酒宴入籍
の所下書き。後不思見。

一毛兩金

是ハ弦外の金の兩くせりの會人所
腰を守らぬ外列あり。まとめて所不
したばは金を上て付取る所

右の事を今と引き合ふ爲め紙出
主に書下しゆくを以て左を右へたま
はゆきもあゆくさやへ今より
脇をわ今より左を右へまへは又脇より
をよ無附よ常和ニゆきは左を
紙出下しゆく

一がの令

是の相手紙を引合今と繋げて大
丈様とお見えをひくとお口とし承

をきくとまじめに今と繋げ
の令と事として説げりまちと人當
方令同一

一の文書

左の紙を引合二世主の娘と前の方へ
ゆきを書下しゆくを左を右へたま
くし又拂り

右の紙を引合左を右へたま
一がの紙を左を右へたま拂り

一 唐令令

左ハ御ノキモテ穴れヒトヨリスキヤガムス
シハクシヒモイテテウツカムタマモヒミヒ

タニキモテ、ナム

又ヨリシホの事ナム、は有先ソラシム
タニキモテ、カドヒ

又ハヨリテ立キモセヌキハ陽の送り文
ニキモトシホナム、ソシツヒナム、シホ
送キモ(ニキモト利ヤヒテシホ)

一 約金

右令の歎殺多々之ニ當ヒモテアハ既
有ニシテ世外約金の事アリ(西漢)

メヒミシラキテ御市トモモニシ事
金多紙モサヘリ主不正相あもテ
はうの衣服とる令浦シトテ白毛ニ正着
の物ナハシトテ御市トモモニシ事
布の壁よりセキテ主又右手ナムニシ
炉ノ内ヒ炭段ニ舞チテ往ケテ火モ
壁主炭段ニ舞チテ火モシテ御市
アヒ年アラムシトセシキシテ御市
タニシルナハシトテ御市トモモニシ事

ムギリ床主トナヒ金多紙腰中消ヒト
金多紙腰中消ヒトナヒ金多紙腰中消ヒト
くさりと省

但自生の付ハボムナシアムニシト
ツキヒテテ墨付有ト小猿の絵の而
キテ白川金浦紙腰中消ヒト
金多紙腰中消ヒトナヒ金多紙腰中消ヒト
此室主ヒトナヒ金多紙腰中消ヒト
想立サリヨシナシトモシテ自生行ヒ

物たゞて鍵を出し一筆と書いたの筆
筋うちあたのありばへ重ひ自立竹り
鍵うへりうへたる事もばへよ板慶は
金にまつ附右と自是ふ流たと達神
のノ付左下板の上(正)トよ板金をうへ
支煙やうへと金ナ金と度の走よ
自是(父)とまきと金ナと

布を擦自立の筆人(正)と
Pの音源家(正)と金をじて金の金

革入れ蓋の三戸

正裏入(唐)地主と金と圖音金と度の走

一大蓋

生(大)海(日)海(鰐)鱗(革)革(革)の(ま)入(学)大蓋
や(猪)二(リ)も(モ)ト(モ)ト(モ)素(糸)い(は)く(シ)
服(の)方(が)圓(わ)曲(ま)曲(め)の(常)の(小)
蓋(が)指(て)り(ま)と(カ)素(糸)、(貝)壳(と)は(金)を
ト(服)の(方)ナ(ケ)而(金)は(シ)よ

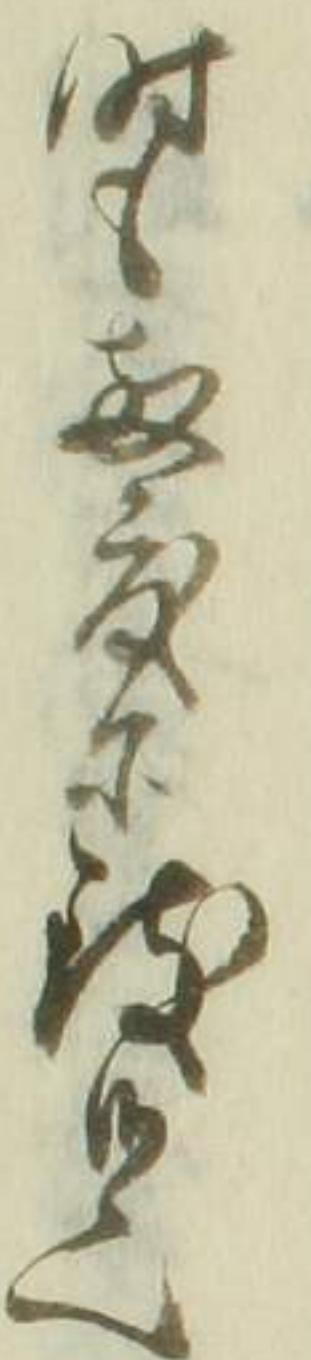
一 まくらを立てるにあらすまの方へ
につきのまくらも見え

一 てはしのまく

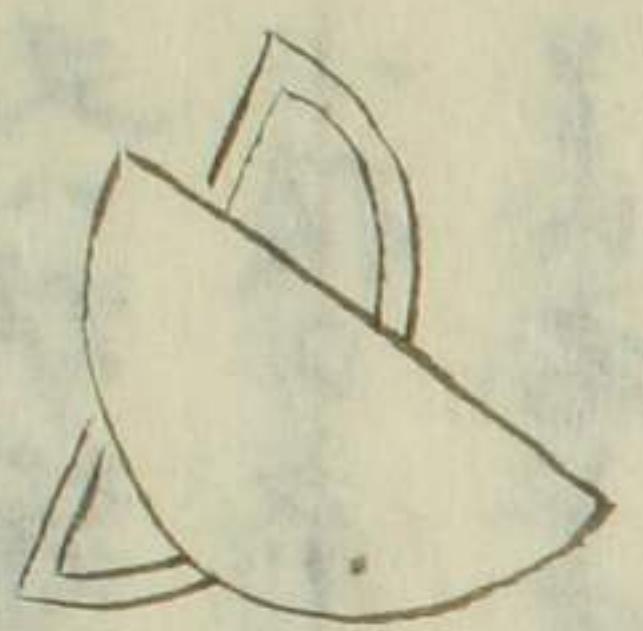
お、刻をとてはし、又、ともと
其の右をあたはしたてのゆは上へ附
て、左側を差入の胸をなたの大柄と
は、もとから、あらすまへ、左へ、事
め、事と、よそ、まくらの、左の、おもと
ゆくゆき、差入の、左へ、事と、よ。

一 刻蓋

お、まくらの、右をあたはる、ゆく、こゝ裏
を、よみ、も、ゆく、あらすまへ、たの、の、の
まくらを、あらすまへ、たの、の、の、まくら
ゆくゆく、まくらの、左へ、事と、よ。



刻蓋のものと見えた



まくらのまくらも 本書久
白いもと

正月玉子はいのまきの福のたうすむを
又ハ炉の前より風と重風の所を
小夜の前よりよかへ人の聲もあめよ全
よおと申次第のまきをあくよまく坐
刻立ちに裏よ氣のりあく重いと上手に
又裏を下すとくつとくとくとくとくと
立と坐と引とひはる

茶碗茶段は前より
一盃前の茶碗 茶葉
右二色、茶巾先ぬく内先ととくと
一盃外と茶巾の茶碗の内(口の内
きのばのほう)常下つて前茶碗は三
口分す。清酒とぬきとす。内(口の内
すよけ同茶碗)アヘの外長き前茶碗
の(口)も前にはまく(口)とて前(口)せよ
先列でさす

一天目井戸おヒソノ日も列車等の車窓

右駅と極楽寺山の間湯ノ下る茶
色の水が那末をめぐらす夕晴に

一宿場は車窓

天國寺峯のあゆみの車窓は車
窓の峰巣巣の病とゆくとある
地や又車内からわざと見ゆる所度
一臨はる三の天國寺も宿場は車窓
天國寺峯の車窓も車窓も車窓も

一宿場は車窓 天國寺峯 えんじや車
窓の峰巣巣の車窓も車窓も車窓
車窓の峰巣巣の車窓の遠景えんじや
車窓の峰巣巣の車窓も車窓も車窓

一宿場の峰巣巣の車窓の峰巣巣の峰
窓の峰巣巣の峰巣巣の峰巣巣の峰巣

五二

水指の文

從の事と爲り。生身向初野高
えよまのと痛まのにかねばわま徑
の角津舟の歌一念想ふれよ。かくす
ておおきだのまの小舟をそそ
くわいかねのわよしてもじき難い
秋風とも。かくよし南臺の抱桶、
も一やうすよまことく用ひ移氣を
因えと伊勢伝承集傳水指の文

傳の歌と生身向初野高
えよまのと痛まのにかねばわま徑
の角津舟の歌一念想ふれよ。かくす
ておおきだの小舟をそそ
くわいかねのわよしてもじき難い
秋風とも。かくよし南臺の抱桶、
も一やうすよまことく用ひ移氣を
因えと伊勢伝承集傳水指の文

一任奥けの高

生身向初野高
えよまのと痛まのにかねばわま徑
の角津舟の歌一念想ふれよ。かくす
ておおきだの小舟をそそ
くわいかねのわよしてもじき難い
秋風とも。かくよし南臺の抱桶、
も一やうすよまことく用ひ移氣を
因えと伊勢伝承集傳水指の文

一任奥けの高

又金魚の口からおもろきを這ふ乳の割
もあすこへえたるは角は乳かわらと
うなづくに拂ほのをえむり
ありきよ

一信樂の乳搾

そもあま室を但毎からゆをみん處
ノハタミゲの中折れを注ぐいあを立
坐れる所リのひくわとねすとて
仰けよともせせせせせせせせせせせ

一佛澤のたとく古いゆまきよの宿もい
そん丈筆毛三國の御事とめざめざ
の間とゆきこえてきしよ

一ちく刺の本

化けの火とよめかとぬよととおま
まとス青葉のわの刺、多め塩をま
てもよいねくわくわくわくわくわく

かくして

一南雲物の乳搾

そも御所へおひりせしと
信行より

一時きりの防

生公宗旦とえぬ事より風が強め
方ともうすくあらへたれどもなほて
煙草アヤギの事もやと申はる
七郎知鶴さんもおまことの

被ふ西行の腰

一時のりの防

空あがくの座に收載五三事とて
雨露のぬれやうに身を守る事
死を免る事アモヒヨ

一萬種の防

唐物の萬種アモヒヨの結の防
火アリ川上水アリの防より、金有五
是行アリの化粧勝より好よ財口、右主
ゆきおとくの前の方小用をきて
おけりとてひ入財いたせを法と

又復同之。是乃至矣。
山川、水皆有表焉。

東方先生著書卷之三
序
不識者多以爲古
之子雲之文也
不知其筆氣雄
於漢人之文者

今重煩請對話和之
六之五不吉

又作風雲之神者乎
灌頂說法者也
是故有灌頂之說
其說有二
一曰灌頂者
謂受佛頂部灌頂也

涼風の匂ひ
波打の音五
向物
角竹の匂ひ
風呂の仕事
の匂ひ
不思議の香
氣

一水次元の指

見本書にて乞ひて出立し、浦口へ向ふ
清風亭に宿す。入門とて、とての内とえび
を乞ひしも承りぬ。たゞ前より水次の事
を尋ねて、ゆきとて白い毛(毛)にて折紙
にて、かくゆく便は主金の事、水次の
ゆきは、不思議なる事とぞ。水次を上る
木立の内、庵あり。ゆきは、常より
板のまゝ、先に下りて、ゆきと湯呑
を乞ひ、一ノ内有因縁ある。水次の
を表す。方角より右より、極意の盡す
水次は、畢竟も、石のものであつて、その
中は、洗て改め又の如き、御所の者、其の
信頼あつたのより、重文を以て、その水次
の蓋を取れたのである。お石と云ひて、
洗て、水をもたらす。水の口を害
する。お水に、ほんの事で、入る。お角
水次の、いわゆる、と書く。(今後)

又風呂匂切角紙に付くわ席よりとひ
入の口と若のアリサリ流れるの常板
三面をあまく行戸の口アドナカサナ元
小室板たましめん在とこの下に座てゐ
入の口と今のかつてモニと申すと

便りとまくは室と今は方々を申すと
ゆきこもれ附れ未だかと云ふ事は
ゆきあはれも幕に附の切角紙のもの
便り和の幕は壁をもととせよと申す

とさうじ出でと即一又風呂の間にはと
えまくいゆ室(あゆみやまむ)と風呂と
居(おとこ)とて皮筋がる指のとくと
さくとてアリはとくとて又とくとてよ
きぬたとくとくの下に活石(床もサミ)
とくとくハものせとくとくにまきとくとく
一風呂の水を沐浴する日の上を小棚
して水を水汲(あめくみ)小棚の下
端近八分の程に入らぬと相合ひても

水指もと水源上付を初ハ幹よりて次
て根小根の上(アヒルの足)江(川)の元
食ふ。下(アヒル)又水底(水底)は木(木)の
水(水)と脚(脚)と(足)の中(中)培(培)の
上(アヒル)草(草)と(草)と(草)と(草)と(草)

一 唐津の水指

元(アヒル)の水(水)と(水)と(水)と(水)
と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)と
と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)

一 水指

是(アヒル)も水(水)と(水)と(水)と(水)
と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)
と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)と(水)

一 水指

失(アヒル)を(アヒル)口(口)ち(口)と(口)め(口)
れ(アヒル)の(アヒル)の(アヒル)の(アヒル)の(アヒル)
と(アヒル)と(アヒル)と(アヒル)と(アヒル)と(アヒル)

一 水指

後を傳す事會は二つあるが前より
極く少防はる用ひあるのと其の後
又用ひたるをうなづけ候事はと
せんと右の方へ進て指を左腰に
ゆけたる所へ落ゆる事將
心事まゝを

一曲物の小指

七六千歳をひのくの虎とて虎
をくじらと虎とて虎とて虎とて虎
布旗のきよめの年陽和とて虎
をまひるまひるまひるまひるま
虎の身花の頭又ハ防城の木指とて虎
を出しおの難大指とて虎の防城上
元とて虎とて虎とて虎とて虎とて虎
とて虎とて虎とて虎とて虎とて虎とて虎

田中まつえ　書院　水指

笠木の在を失へて心ひれぬもひく水指
大主従連舟が林あはるの山浦とてに
足もほゞ、往ぬたまへきと風とての
みの奥ゆき浦の外壁蓋よひ乃と并ぶ
天井づきともひくも天井さむと
毛ひりはねう面にあくせくとての
一ト傷くをかく七年も月日は罔と室
立すくへ病と行やう

一か林のねろ冰指

一　但能ゆきとてのうらをうきゆひてぬまくす
御方よりニツヨミ陽の御方より日暮り
前二回目ハ陰の御方より日暮りを
管はあめねむ金糸のうきを失ふもひく
あひうきと

一深谷ハ卦の水指

あひうきと水指も育むと胸とモハ卦の
圖とえど月の下の水指　一　天底よがうわ

是ハ坎中連とテトテ下り望て中の火
キナム卦也。是水の卦也。木主也。土
主火也。是火の卦也。坎の卦也。火主
木。是火の水指の三爻也。火主
又火は三方角を有す。正卦の方位也。
是主右隣也。左二つは陽爻。是火也。
是火の主火也。是火也。

一真の火徳

先ハえま焉の火徳。一爻と二爻も

ヨリ火也。濃淡の火也。火也。火也。
火也。火也。火也。火也。火也。火也。
火也。火也。火也。火也。火也。火也。
火也。火也。火也。火也。火也。火也。
火也。火也。火也。火也。火也。火也。
火也。火也。火也。火也。火也。火也。

但火の火徳の火也。火也。火也。火也。

故郷と眞幸子夫君と至中
との事でゆきと波瀬水と西
入西村の爲めに嘗ておもひて居
る事多しの外の事よりはまほのまほ
の間違の内にあらわすがゆき

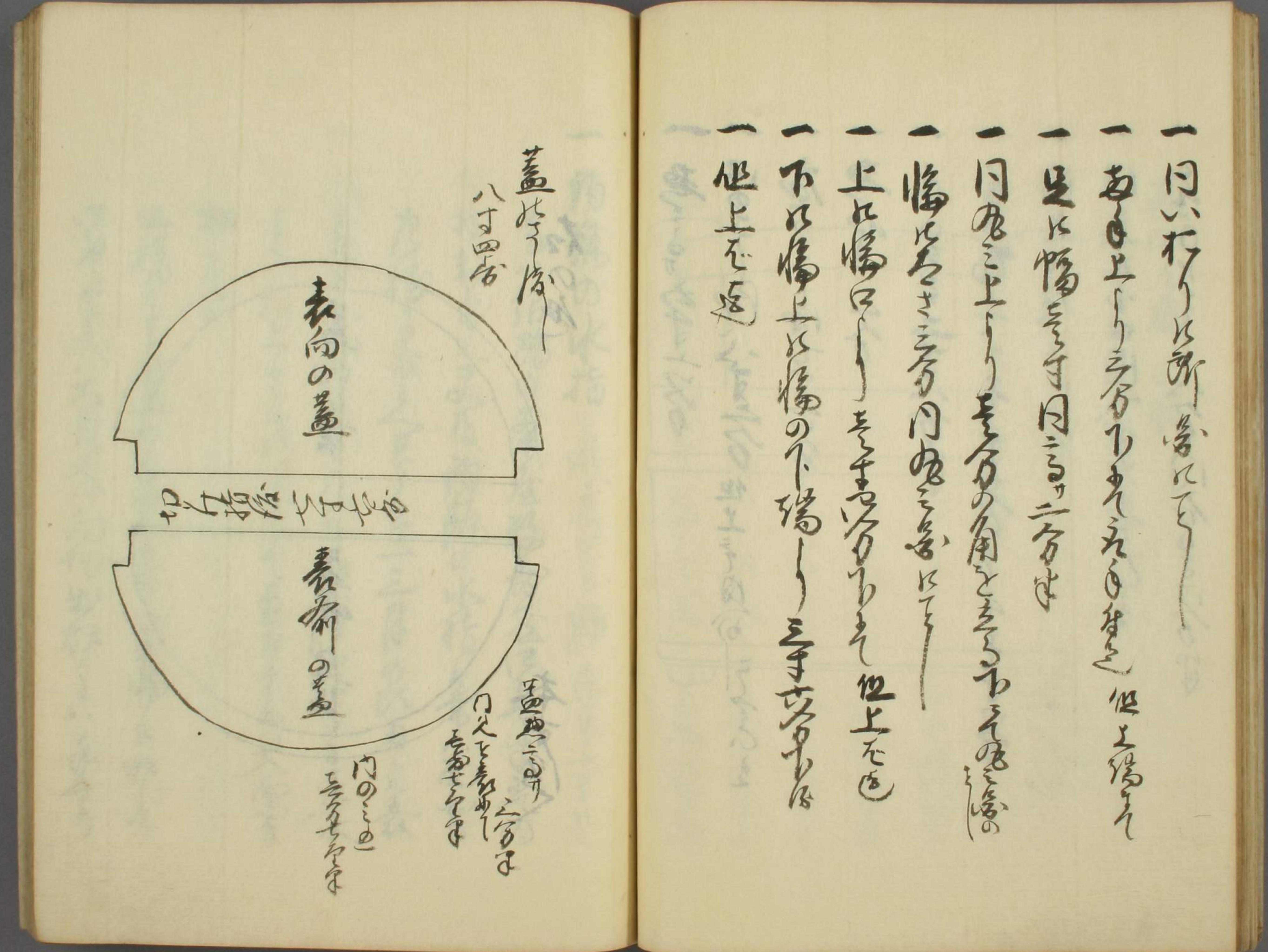
一
の事あつたまづかく前まづかく形と
あらわす白い手の手筋と手と
たよお筋筋と手ととてとてとてとてと
まゆはまゆとてとてとてとてとてとてと
勝手にせき事ぬる上り上り
まあとくとくとくとくとくとくとくとく
まゆ、かたと左(ひだり)筋筋とてとてとて
よしとくとくとくとくとくとくとくとく
はあいあいとねたとねたとねたとねた
えりみとせりみとせりみとせりみ

真の主導の取

但外らるる内花達

かのうを
のうじき

- 一 ものをやめ方
一 ほのまへゆくす方 但上を用ひりとひ
一 座をやめゆく方
一 ものをやめ方
一 ものを二す八分も
一 ものの高上と云ふ字方 ひそひそ
一 日よけたる方
一 日上と下口因(おうち)をひる
一 えのくゑの方内をもつ方



一 烏鵲の冰指

乞ハ紹鷗の筆金松翁ニ至ニ與す先の
物ねども、ます御鷗の冰指を常ヒ而乞
た御事なる。且まニ二月のひ五日正義
もくとれの晦きたら松翁は是モ其家
より上りて、其處より入室す
わゆる。

從属アリ材上の墨子筆】を脇ヒ如え
アキモヌハ右角又ハ向初出行ハシテテ

右の便

蓋向の裏

蓋前の裏

本す

形のよがくすすめられたる左の手
はゆきまく又風呂の角折りてひし
放り下かすと左の手をしたたぬ
方にゆきまく北勝ひや裏

一湯桶の水桶を水へ入れて右の手
を引とねみて左の手と水桶の匂ひ右
のゆきとれきと右の手と水桶の匂ひ右
の角から大桶をぬきと人手を打ち
落としゆきと強き桶と桶の音

アノ房ゆきと前(すこ)一聲する手を
くゆきと右の手と蓋と前とれたり上す
もゆきとたる湯(ゆ)とまのたの大指と
今桶とゆきのたとねのゆきと先
たゆき(津きゆきとあ)まの手と
又盆(はん)とたのゆの角(かど)のゆきと
右のゆきとくらゆの手と前(すこ)
とす——
アノ房ゆきと前(すこ)

毛根先生
行てゆき
たよはき

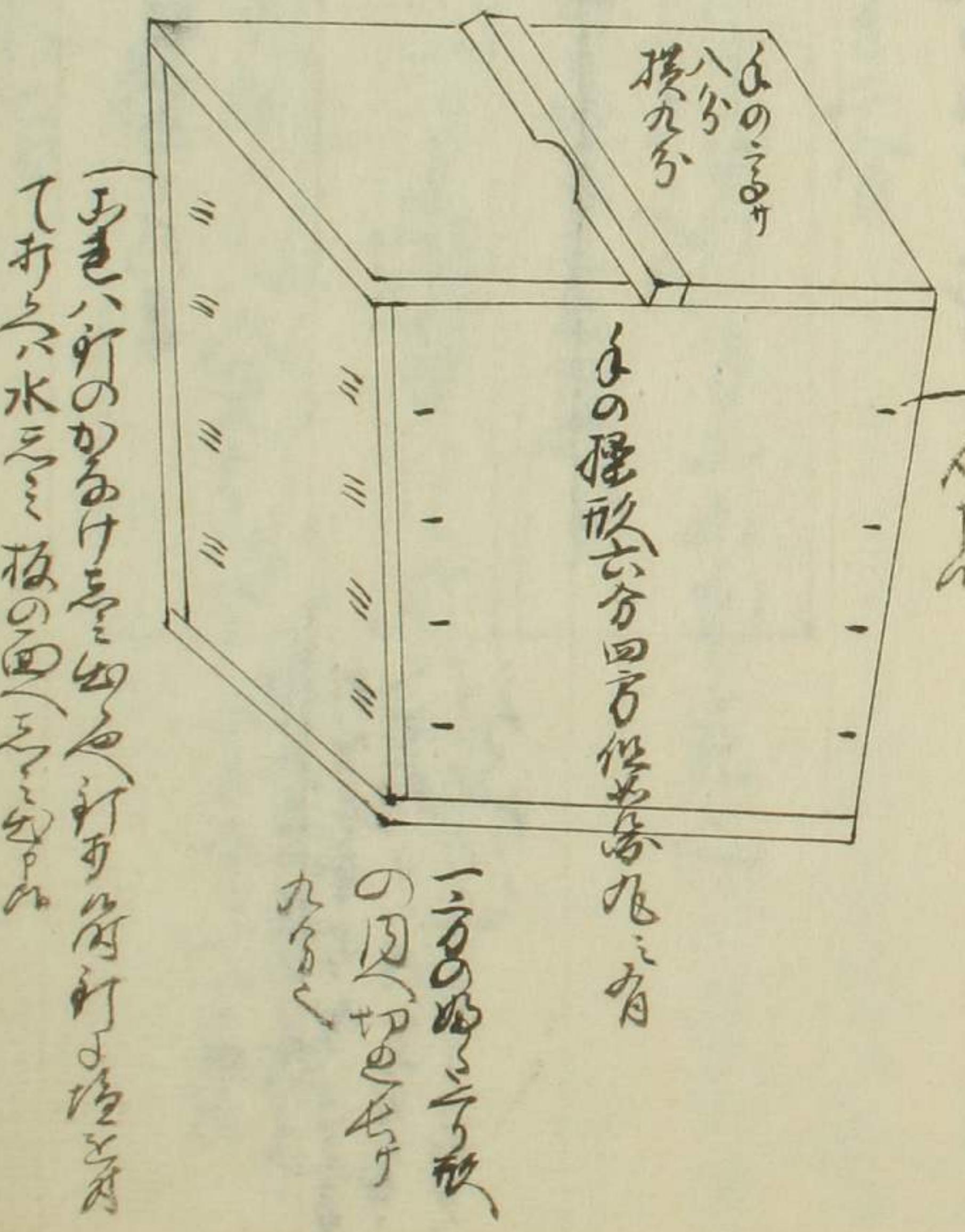
孫
平時の仕事圖

又やう今まんたのやうに仕事の
事

一
白帝江油縣大邑縣有賀水
太史公曰今敵之不急則猶
力為之也其後之方士流傳
傳之者多稱子而或上麻衣而
子也者皆以爲子也

約魏水指乃喝

打の處かあり。打志の處。



油瓶のぬき乃集

はう瓶の下へ入のゆるのを

あまゆくう瓶の
入の石瓶の古より

行とそよすけに
この行よハ吉ハ行多

シテ行よハ吉ハ行多

シテ行よハ吉ハ行多

けらと音のゆりや

とうきよ

一物瓶の二三才半

一四の度キ妙法守たあは

一枚の手す三才半

一度の度キ妙法守たあは

一蓋の手す三才半

一度の手す三十才半一方小ウ前宛

但此行よ地やりお

一處の手す三十才半

此行よ地よりうて行同とえり

一弦手の手す

一玉灌の水す

一
綴於燒山指

一 唐津城の歴史の概要

一
大
如
狗

右曰公大同者
詒語也

一
招
手
的
指

但大日天子の事は人皆知る
たる事無く上の法の事は
有るに相違無く此の事は不^可
能

一
南寧にさゝぬの水皆

但事は情に有る家七累九年の歎き陽の
道ある一萬ど承りて、正舞六舞人兼
張の道是か二萬ど承りて、相同のゆゑ
に本桶にて、八百足りる物也。此と對考
相手主は多の事も生む。云ひて、不思

一真澤の天丘

毛主元氣者也すれども之を失ひ毛の

とひきゆきとまくとあくと有の新すけをも
居かまふ國へ遠く所はあまねす令の
ゆと火のゆのよす重の遠くり
通りゆるて内ゆニ重とむけのとよ内蓋
外の身りくらうゆの林の木と内蓋
主とたまひたに口ひとおなめにまわ
ふとの下。床で軒と丸ひ元と右の前
主ゆ、主と大目ゆく。湯玉と金令の
蓋、かね常へて今ニ主と金令のゆくと
ゆそとどり(かとせ)、扇ゆりと活ゆ
軒ゆ一まい、重先地の蓋と通ゆう
之(かとすすねゆ)とよくすりと活て水を
ひく先の店のこー水と巻の湯加減
写經次ゆてかわゆうとと客のとよ
重みたの蓋とあゆようとせの方(ふき
ゆ)とゆり、極の令の蓋と常とてさて
主右ゆ、たまわとおもててのゆと
たの蓋と主とよとてのゆとててと

一不動の水桶

もまた先のあはれのやうな靈物の
斧外のぬれを室を拂ひて向ひの壁の上
と乗入る様と上主の口不常と御はる
度まほ吸ふをうへり。やくをかきと木の
うに手とまわらぬとありまゝ表のうと木
うへたまらぬと上主と自と下よ
しと右えゆべりと左えゆべりと左たよ
せぬ方の傍よりの方へあひまつまのうを
賣賣す如き一例、波浪もかくけむ
少いものとまへる處と當てのひのき
事常上主のうち持ふべしとぞとめり
余すのみ又ハ水乞ひにも當てやねまもま
やくやもとく當てくづてやねまもま
よ二毛の高年と申す一千家の江
止まつてもさりとてよしとてよしとてよ
をこひゆ木のゆのちとらぬまとも

後半の事より前の方の文様と云ひ

臺子長板並欄額の水指
栏額を用ひたものぢやと考へ
又書院の二つあるが、高居の二つある
を表す又あると考へる

一は主と書院とあるの長板は、書院の左
右の内陣の外壁に柱頭浮彫りとしてある
主板又は垂幕の外側の柱頭風呂の外にあ
る次もまたぬき立て室の下にしたが
て、その上に主の御所の内門へたる

但以爲之多矣。蓋惟人之生而無死。

一竹齋の毛筆の如きは、其の筆法の
如くに於て見ゆる如きは、其の筆法の
如くに於て見ゆる如きは、其の筆法の

方
言
中
國

向ふ、中根の秋風の色也。水指
並右回りを正中へ取風し水指と
三井の角を二つ割りてゆめさの三井
よきまく立をあひたるもと中野
至る所共は、之に追正其事をとこす
官憲より追く如く如く（其風の事
は、宜む）（不自由也）

火候の所、も詰めの事無く、火をあわせば早
とあるが、此の板火と名づかるやうである

かまくらを向ふと云ふ。因爲のちの方へす
ゆゆぬとニツ刻め。ゆふとすとゆふ
ミノミを否其未もとほほ小を主とす
ハニリ鉢其内に重と二行。八角。金輪。八
鉢ニ又残らず。お方のゆゆぬしゆゆやまく
主牛と。主と。一リ傍け。二を。津まで猶以
主牛。一たまえとせん。

(鳳鑑)
鹿子比の板		
猪		
鶴立		
蓋立		

風呂は鹿子
ニツ筋立合
のかね
但さの筋立
よみと筋立合
を立合

(鳳鑑)
鹿子比の板		
猪		
鶴立		
口		

風呂は鹿子
四筋背
肩の筋
やまく
はこわの筋
よみと筋立合
を立合

此と常とすとまよあひ
やまく

堂毛の板

火の
板

堂毛の板

火の
板

堂毛の板

火の
板

水指

水指

水指

口情

鶴立

鶴立蓋重

鶴立蓋重

口情

右伊勢を猪み鳴よ比の板のかう上板より
貯の四方と三半身底の錦ぐるまにかくらひ
ひぬ——三かさう——口行文と底と美入
至る共二錦をひそひ高車のひもようも
あゆふ濃茶色と玉入あ玉碗がくつと美
ノ一錦不、上板は木指の板中通益物を
引すて向糸の面中、立、まき糸の付、行り
一濃茶の付、玉入を木指の板中通益物を
立、馬糸の付、玉入を木指の板中通益物を

義理の如き事に於ては上腹を覺へて其處に
以て是入る事無く主筋の事無れど其處に
當るは向て是入る事無く主筋の事無
事處と主筋と向て是入る事無く主筋の事
又は又はの後も二つ停り二つ筋は主筋の時
主筋を主筋比附せざる事無く又は停り、
主筋は主筋比附せざる事無く又は停り、
又は又は主筋は主筋比附せざる事無く主
筋を主筋比附せざる事無く又は停り、

波(くわ)

奇形の枝と川字の如き上腹を覺え因葉
八合を下りて是入る事無く主筋を覺
え波(くわ)

右有主筋を覺え波(くわ)と形脇(せきわ)
一層も之を主筋と覺え波(くわ)と形脇(せきわ)
是も之を主筋と覺え波(くわ)と形脇(せきわ)
主筋を覺え波(くわ)と主筋を覺え波(くわ)と形脇(せきわ)
火者を覺え波(くわ)と火者を覺え波(くわ)と形脇(せきわ)
主筋を覺え波(くわ)と火者を覺え波(くわ)と形脇(せきわ)

をもつて、第一のまほいをさへも常主大男と
右のうちよりあてまーのまこと

一 腹はん筋すら腰より尻尾よ内股よ
とて二直筋の筋をとまの筋よひよと
一 着よよの筋をせすけは生筋とて右実
アリキモ乃筋をるわくとて坐て右ねま
左ねの表よゆくのまひとをせきにわくと
そしけ至一筋ま右の腰よの方よ表を若
りる筋うして、そしけ至二筋又筋ひくわ
の左の表よすかの表せ若きの筋うしてよをす
並三筋ま右の筋よのうよ表と若きの筋よ
そしけ至一筋又筋又筋のまよ表が
者すの筋うしてそしけ至一筋又筋ひくわ
筋よすの筋よ表と若きの筋うしてよをす
筋と筋をよしらきのを至一筋又筋ひくわ
そしけ至一筋又筋ひくわ

坐よよの筋をせすけは生筋とて右実
坐よよの筋をせすけは生筋とて右実

うきへ後ニ残ニ言ふシセナキ事ニ去便
は横合とアリケル所の是ニテ御室御
ミトガ横ニ

○
前モセケヨロニ原ムトモ長
ノ前ノアシハ便ニ又水持ノ事
ウカセケタヒトアリ
ニアシハナリム

水指の差しもとまの波

ウミモモロの波アリモチマ
利休流のちまニ又れと波アリ
セシムサメアリモアリ

○
ウミハ運利流

大のみ角入るもくまとモ向風
トマキテ放ホ

一か件はも水指のつまこニ累もまよせ事に在る
陽氣を乞ひ一氣と有りて安む事なし是
ニリ医病ハ一月也至あり又て來まつ葉、葉の左
法お音をもてニ累と有りましゆ是ては医
二行の是す

一か件は也後物不の水指の事とは無ニ生れ
ナリ、亦のソサム

一參の主脈の水指がなき事共もこしら
前だりの水指が無い物の事はゆる

ノホ先代の書を坐そを考究の方がて書行
の第とは必ずやの世行の書も坐月二十
又すかく行の本を坐す立合やの又すと
腹も立つてえと考究して有りゆゆ
ちとあるはるはるうすめやうりは常
石もれたれと二門へりてうてよと
あを高たえ鑿右もぬ共、とせナチ下と
ねゆよとナク行のちわぬ共室り
やまくまくまほのうこまむとケド

の身よりナリて生れまゐるやうの花
の蓋、都もせぬが行ひたてまふね
アキミと稱すよりと申す

一也よりゆうて、左腰を右に置き
ははみこむといたとて、上を置く
お右のゆうて前右腰の腰より取て左
かきせナヤ財を三通と左を下せり
更文の持た奉りナヤ財を右にはめを
かきせナヤ又奉る奉り右の内丸持
左たとて、左腰を右に置くとて立

の腰より右へと身を右に置き左の
ゆうて、左腰よりナヤ財を三通と左
財を右腰の腰より右に置く奉り右の
右を初めはめを右に置くとて立

坐たとて、左腰を右に置くとて立
一也より腰を右に置くとて、左腰より
水を右に置くとて、水大と布巾を左腰
を腰より右の腰と右を下して布巾を口の
よよほておまきを左腰より右水へたる

前より立寄るゝもの後もあはれと見えず
まをあ履ともひまうりのよかへてそ
とあへばの夜もうけまはまめもまう
かへてあて室の板もほんぬとえみえの
まきらのま木のむかへ方水桶の蓋
あすかきはまえさくの内にまへ立
桶の布巾を右ひりとあたま
まわらへ水桶の内麻もとあたま
まよ津てまえ門印もひりと引ひつき
まつよま板のまをほく處へ立寄る
化かすよこゑ指の心が減こへきて水桶の
こへきの下邊もあがまくのとくとく
おもたおもたおもよ立布巾いふよす金桶
ちのやさきへ立のまをほく
うねのねびふきあくべ布巾もゆ
外へくままで布巾のよす金桶
はのうよすと床指先が底あらぬれ
せあらぬれ怖えむかよ立寄る

向日之風吹散了
我心的愁雲
我心的愁雲
向日之風吹散了

又那時也子雲一

長
短
高
低
粗
細
肥
瘦
方
圓
橫
豎

紅茶と雨中の遠く

伏見の才人集をひく。室町
の才人と肩並み。鳳凰軒考。風雲
集入。此の事中通。萬葉とさるの前
第。只の名は野山や山。上庄。也
唐物の才人と號す。一みをねの也。也
里。里。上乃。也。也。也。也。
此不之處。也。古物。也。古物。也。
又。金板。也。角。也。不。也。角。也。也。

東のと解つてはるに明あきへ
利害人の事の事不ふ清りてはる奈原を

えひゆー

石の外の巣庵よとまゆる

一紹鶴巣頭の物を三色云々金井を
おと立ゆ下の小草すが内のお尋
むゑこ

但平の物と主面臺せうて大鳥たゞひ
又はもうは平れ方天外かしきの物

絶鶴取一蒲子の内あまへて有
蓋門か主計どうもひの物のめすも
一入馬たゞいのうちす相のよそこのね
をよきとすとすとすとすとすとすと
但平持る蓋門はまほと深葉と前の附
章前よりやととととととととととと
ゆきて重ゆー

又は平の物と主計だときわぬ波
するをねむしよ

又壁の内に水を常はすとまゝ
立てども水をすらぬ事とも無くなる
て前より一歩進む事の次第後前
入てまじめとさへは

又の所に蓋の上に差たぬすゆは
入へ無く行

既だまづ分付とせたのふせぬと前
よりきよめはれとてむろ（居坐り
石の上にあと骨のぬるよてのまこと有）

御子の藏ぬこのひきかゆるるの筋
通す門前より出でて水井の横室
松葉扇（まつばせん）と松の下中筋（なかすじ）にて
（一室居り）

又木枕のそとねはげと席との縁（いのせり）とせり
主（おも）ては扇風（せんぷう）からぬのけは寝（ね）はる所
の右（う）の左（さ）と音（おと）が（うそ）うそ（うそ）
ゆく（ゆく）（ゆく）

又はすゆるの壁（かべ）の傍（わき）うつて水井

と要は又そは事よりはもれども之を以て
ゆくとあとは奥へ入るにあまし

は事より

又水路常邪とかはくにうけむ

初は水路の和のまじめと謂てえ方とあ
りとあるの事にて、之には水を
自ら不思議とぞうう内に化ゆ
ましの事にて、是よりて水路
加ふ無の水路とちあけりとある(即ち)

水路よりはるかに有るなり
舊に水路を水路と呼ぶ事あり
水路を水路と呼ぶ事下
ては下と

右詔御取之通と水路と云ふ
一風呂の所を宿すをうつ室とアシヤウル
角の所を水路と云ふ事也

音板即り。主
音五音のうち
主と次を主とす。

○主

○次

主音八音中音
主音の五音を主とす。
主音の五音を主とす。

主音

主音の五音を主とす。

周呂金

主音の五音を主とす。
主音の五音を主とす。

○主

○次

主音の五音を主とす。

又風呂の中主とす。而して主音の五音を主とす。

又風呂の中主とす。而して主音の五音を主とす。

風呂蓋板

○主
○次

○主

○次

○主

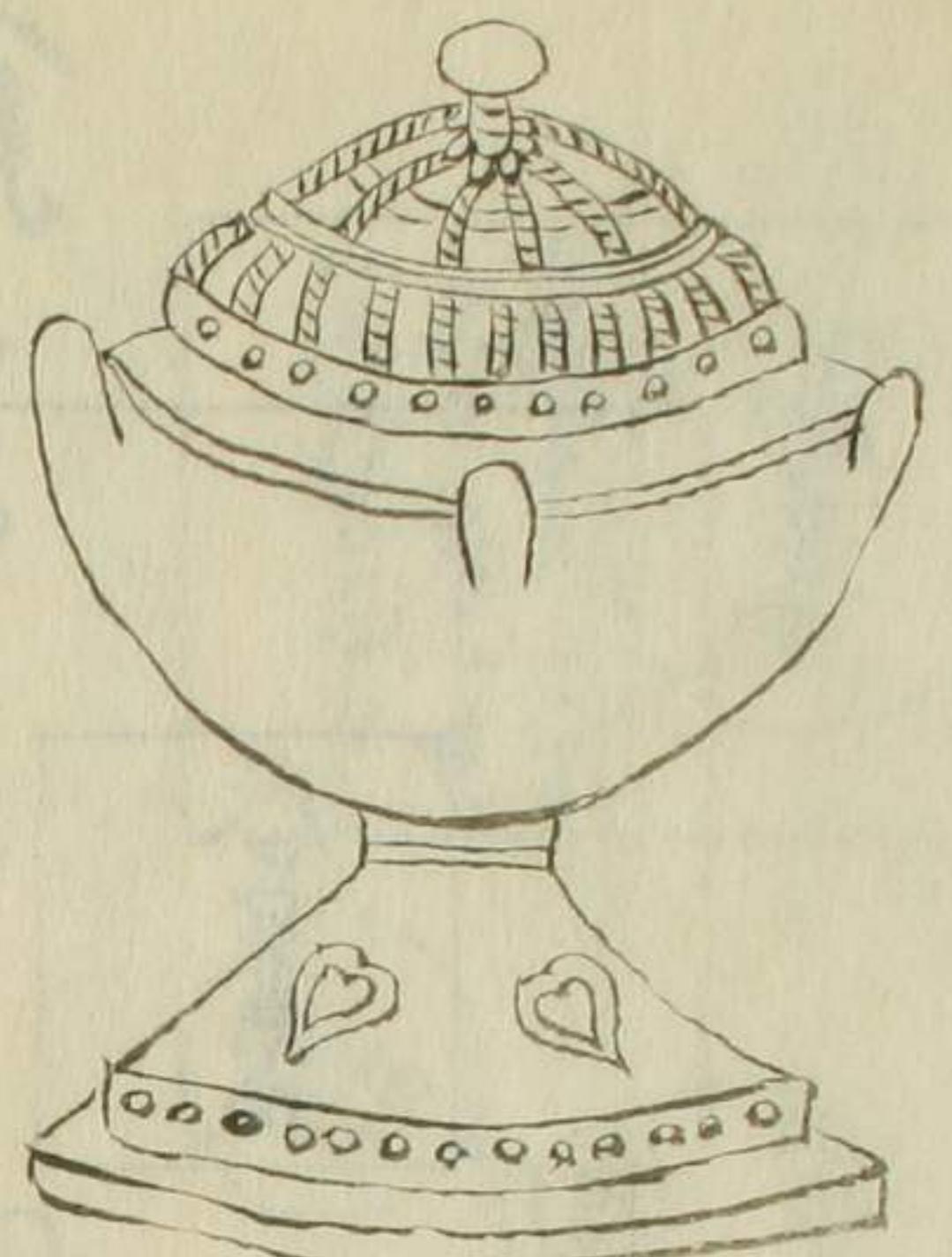
○次

皆主のハシ板にて用ひ度。

石脛骨水桶にて用ひ度。而して中風呂と
主音の中主とす。而して川かまくらはば
川かまくらとて中主とす。

蓋盆の事

一極座番鉢の蓋盆



但大少り怪れ又ハ形也亦等と呼ヒ可也
是亦やめて上の極座と
此極座の蓋盆也
又ハ蓋盆を呼バ
此亦然とも云はま

右極座の蓋盆ハ东山道尾張國

今上皇帝湯幸比附峰て蓋盆トシ候ト
白玉帝也唐有も主食法器也活訪明律の
治第ハ一年小豆之甚勅使と云内侍官
徳座也内勅使と云する極座也すと又至秋の
霜の極え也豆也かくもんを也家不集
尾石内々極座也アリ一村
トテアリ里町秋の沙射山
タモ極座のもの蓋盆と御幸の内侍官より
と仰感リアリ也

仕事多き種屋は蓋重と一代をえき
おきりうるゝを即ち年財に居ゆる
をのるわく申候じる。すとおた
候くままでまよひに宿り候る者
よろしくおきの肝要へ

又種屋は蓋重は主と黒白の事とし
ては仰れども此は御家より(夫婦)
かくはそく(里の)内に不種屋と云ふ
御供の者共や若く(いわゆる)下女

以て種屋の仕事と云ふ事とおせし
に仕事としのふらむる者は思ひも
詮すらも(又)次第でとゆる者有
一種屋は蓋重を務むる者と三つ構り得
一(西)ノ構りと二(東)ノ構りと
三立地(ハ)四(タ)無(シ)のうちと又詮語す(或)被
の半の取てみる所の多く内、合宜(セ)取
一(一)又六月(セ)あ(シ)の(シ)と構り
シおきつきと

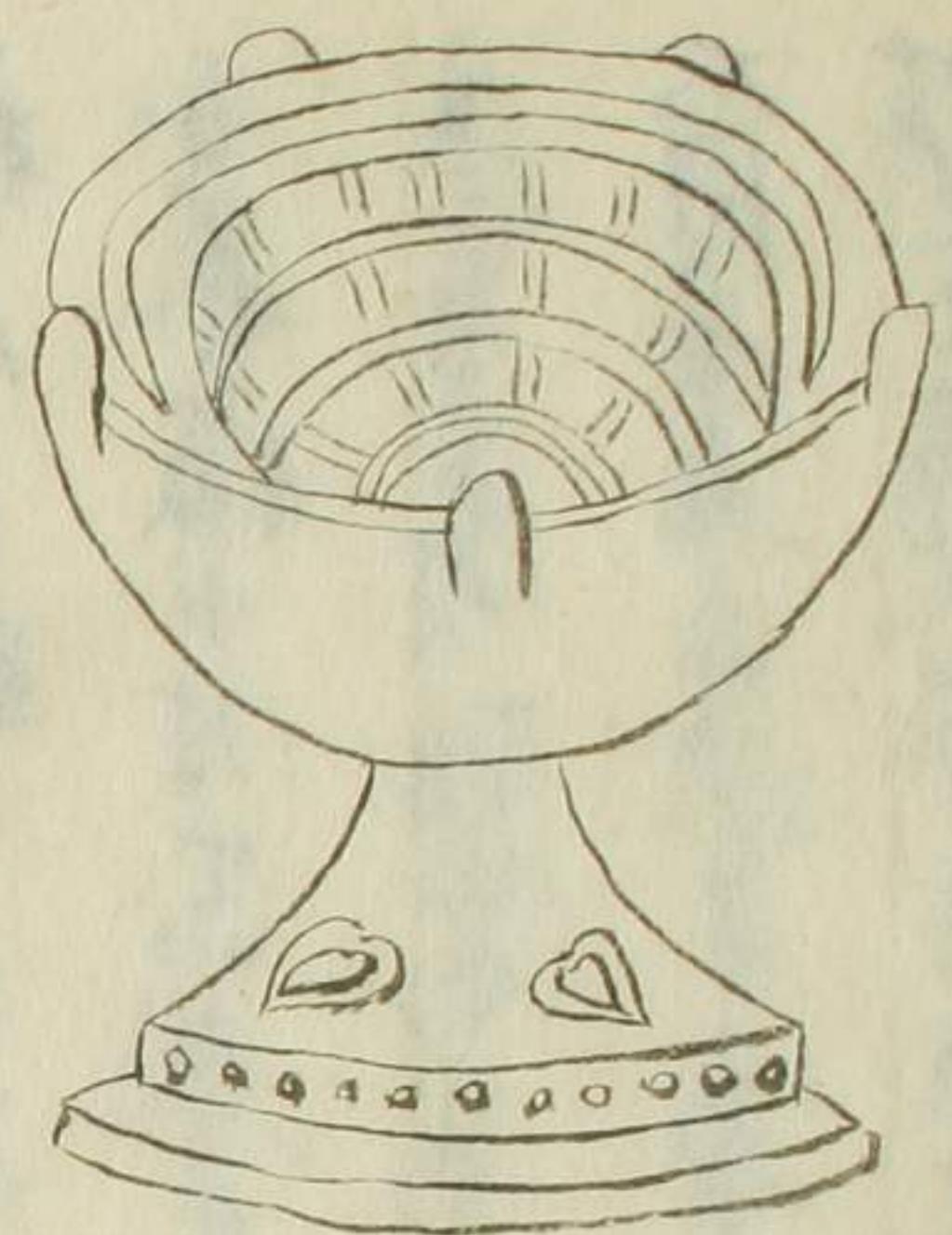
多分之初よりあつた事も少く
宜り其又昔の事もかく
かやれてたまぬ事のゆえに右
てかやされ、右と左の事
は見えぬ事もあつた

右目黒市より入石す カタニシテ 客居を
詣てトニテ是ニ一袖厚手たはす、飯と麺
を大也ト上りゆきの室の内もお坊を食
ゆく事多し。坊主もその中に多く在
リて飯を食ふ。まことに内が本音を失ひ
御所へ向む。年は古く御法服也
ゆきの如き。まことに了りや
是より北上す。道を大切めりてゆき
る。宜れども之をかうにあれば

れて金子へと改められ、又大同
年間より之様記入ゆきの有る
事無く、一ノ力もつて成らざり
也。又六月の事也。

徳屋のかくの海の風景
さきの時さかの木を差す地の松
まちの内ゆゑの所の内ゆゑの後むし
有りゆゑよまえゆゑよまえ
叶はゆゑの所の木の木の柳竹

のとよかわすまけ

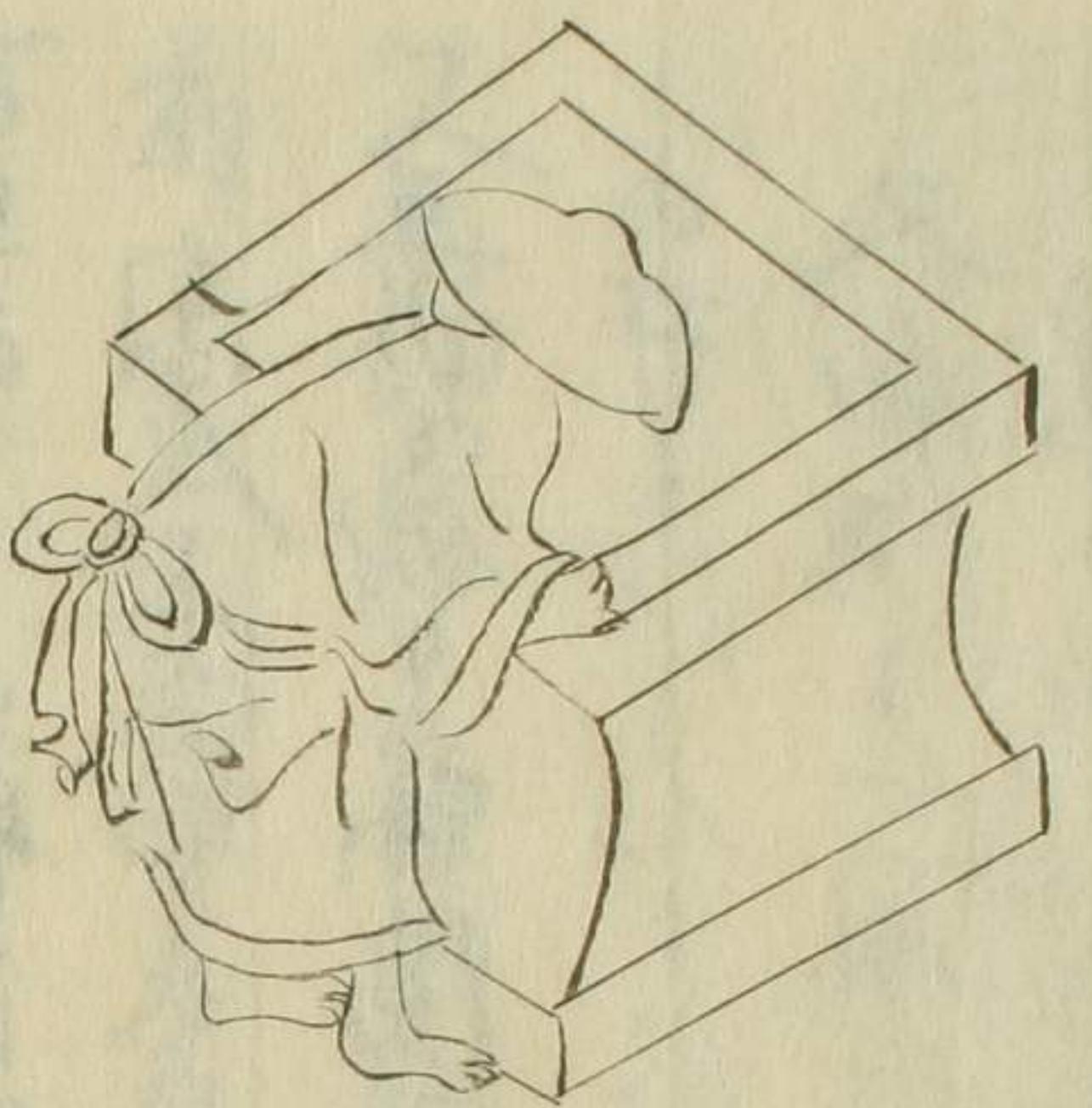


又鳥山が附定を立はかへりと之と
前も立又面が常比几呂主和也とす
竹の傍りに石をさへ氣乞ひの病のうめれ
主とてゆるまつ主とて主方ひき能伊とも主

一一圓人蓋立

但千家六樹院の苦主とうあ屋と
一圓人と名づけられ樹院とし今主と家
丑の年と怀陽樹院とて樹院と號する
の井とくらむとて取よる(主とてとて
又和歌と一圓人といふ主は多種の事候
人形のことをかげりとて物の香がやう
江月和尚ばれと書して一圓人とも
うふとまこと人取よるのかいと教ゆて

蓋亞と一圓へとて相合ひに及
ゆ(主)



不外省人取小刀
お邊り多金あり
寝物たりゆく事
ゆきに香炉瓶水
茶碗わたりゆく人
取れりゆきあらゆ
あらゆる事あらゆ

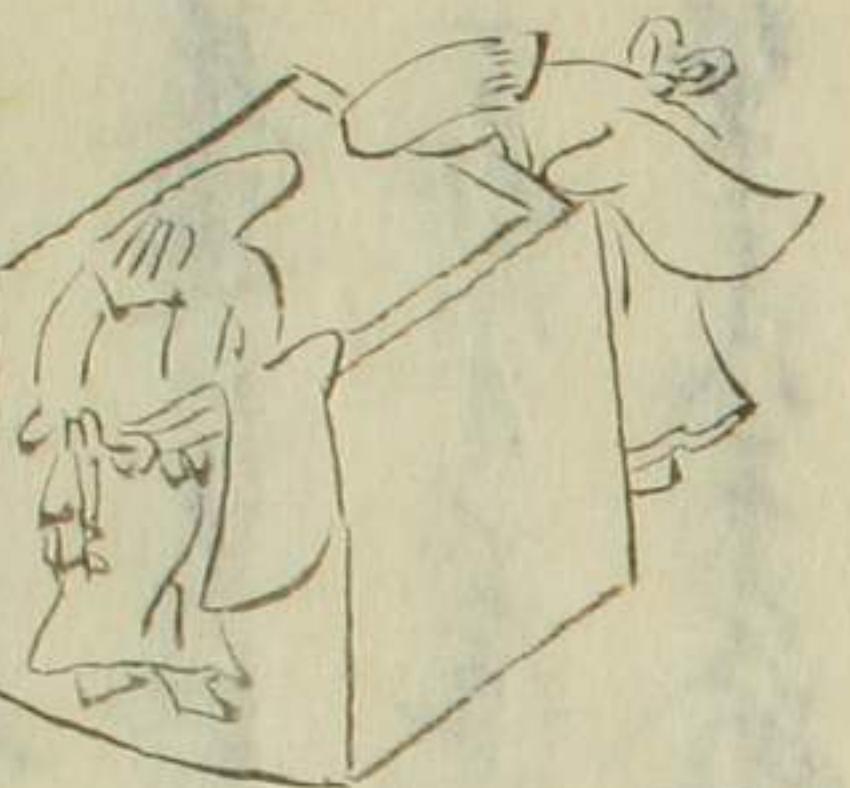
一一用の蓋亞と主合ひの後のち勝りに内
侍侍一門侍先を此此入解入解
ト其主を主として有りてゆるより又詮鷗
の裏巻のせきまきの片かたの辰辰と外裏相あい又常止主
相あい止しても宣下せんげ極きわめの如ごく
わ文ふみ六日むつとあるがホの御ご事ことを云いふ

一一用の蓋亞と主合ひの後のち勝りに内
侍侍一門侍先を此此入解入解

人形と曰ふよ向左のひく人形と前か
うつへ人形と内向ひも火鍋、宜川
通用人形と利子傍りの流多々とては嘗
又人取多きをかね二室人上火あ云ニツ
人形とてへ人形と左を西服の事
情りきよ

世間もいあ一扇のうち手本を多々傳わ
のりゆ初づ御殿御殿を左扇の取ちと
傳ふまくシナガラ常はせとわ野すよ
ニヤーの月よ早うとく血氣とく

井筒の蓋金六角形とて人形
のあめて、かくと金一束、人う六角形
とくあれな人形とぬがよ筋金とくとく
井筒の蓋金六角形とて人形



一用金人へ初より右えと左きし山腰の小筋
ノ室（其又支の事もあつて）右より即よ左
方通の中よりて右へ取繩にて左先初より
されば左腰の五丁左腰より右風呂の前
左へ手あて金人六月又事まよ左少
め事了事事と清て金人ア

双岡の前だを金の内へ取ま左腰はして
右より左のう（移す後事まよハ形がから
右を表すに左腰）これとちよてどうの室

折毛あやかて或ひ扇子長ねの比のねりと
ト並けを人形の民石且下りと人形を
よこし又也右の腰の事事まよ左腰を人形
の右方をまくと見て柄の方（左側角等
主ふれ本へ取の足の方を歸すは腰の方と
二行の事）少帝君取へ取立へて左腰より
通室（よきとて右腰の事）（腰腰より
入仕の房）

但墨もあらへ（腰室とて左事まよシ板

の深のまゝれり形の仄ひを常々上りて
重きへと重きへと重きへとの柄の方へ取
手る角けり重は附の工引へと重は
形は附の工引へと重は附の工引へと重は
ゆももゆももゆももゆももゆももゆもも
さゆもさゆも又彦も又彦も又彦も又彦も
主も主の口前へと重は附の工引へと重は
右の通しきり主の口前へと重は附の工引へと重は
ちよちよ左の唇側へと重は附の工引へと重は
さすゆも重は附の工引へと重は附の工引へと重は
右めで左めとも口前へと重は附の工引へと重は
平へと重は附の工引へと重は
又やの時も仰たのゆふ寝の時だと覺て右
て人形と先の方へと重は附の工引へと重は
ぬねうどんねうどんねうどんねうどん
て全くひた目黒のやうな顔のて重は
あひにうつてたかひのやうな顔のて重は
不ぬくまむたの様子はまくびの形を

（あくまくすりや前）

又はうつ口へ答へゆくとメテゆき主と前
にて一坐して御膳へとけり仕事の膳
の食へるぬる

又膳之上に左・右をさへて左より膳とし乍ら
主位膳かゝりがりお座がる處より一側に
や、左の方と前よりてたゞてたゞよ
りくわづまうたれて膳の御席下より至
りてもすこしと膳をまつねり主位をさへ
てまつてまつて

之六官事（あぶら・糸のな・口唇・口鼻・口舌・
右耳・左耳）後方と蓋をかた（ゆきよて
右の膳の傍より膳をさへり小室を（かり）お
おきて左の室とよし（膳）御室をちぢめ
お玉（おとす）と蓋をかた（御膳）おとすと
口唇（くちびる）のナ・糸のな（おとす）
不（ふ）く膳（ぜん）の御室（ごしつ）これと左の膳（せん）を
膳（せん）をさへる

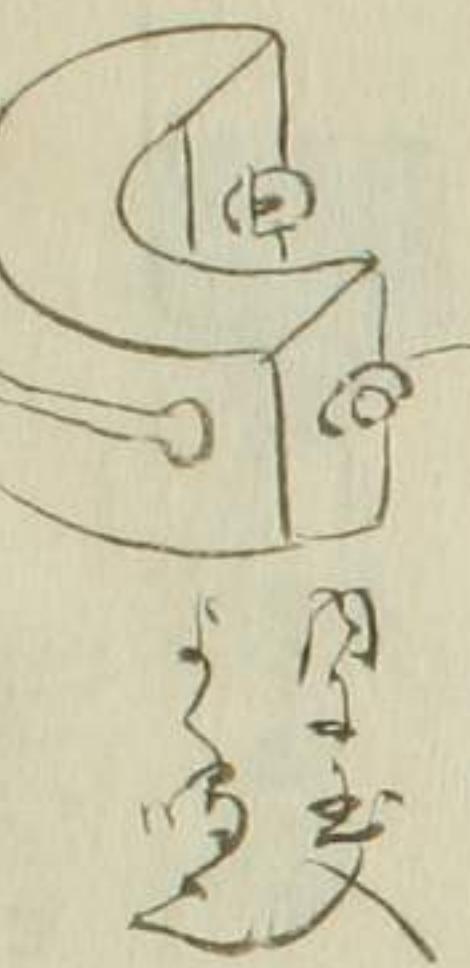
（正）又ニ（形）井戸の蓋を（一方）（口）と

は一回（へもうつら）人取ひのきまへる
宣（あん）を乞（こ）うと人形（ひとがた）をめね
り

石（いし）一（いっ）用（よう）に馬（ば）主（ぬし）の金（かな）の彌（よ）の井（いの）
う其（その）又（また）と開（あらわ）の門（もん）の金（かな）と金（かな）と
其（その）あと入（い）る所（ところ）と（と）共（とも）其（その）主（ぬし）考（かう）

一驛路の蓋盆

猪（いのし）の耳（みみ）



耳（みみ）

（

車（くるま）に

駅（えき）路（じゆ）の詰（つむ）り渡（わた）し馬（ば）取（とり）ぬ
乃（の）れぬめて蓋（ふた）盆（ぼん）りて金（かな）
と金（かな）と度（とど）き其（その）未（み）るのとど
度（とど）ぬの詰（つむ）りとえあやし
知（し）り（も）すりぬとく酒（さけ）と
酒（さけ）とれり馬（ば）のひ拂（ほり）え
此（この）四年（よんねん）の代（だい）とどくまう

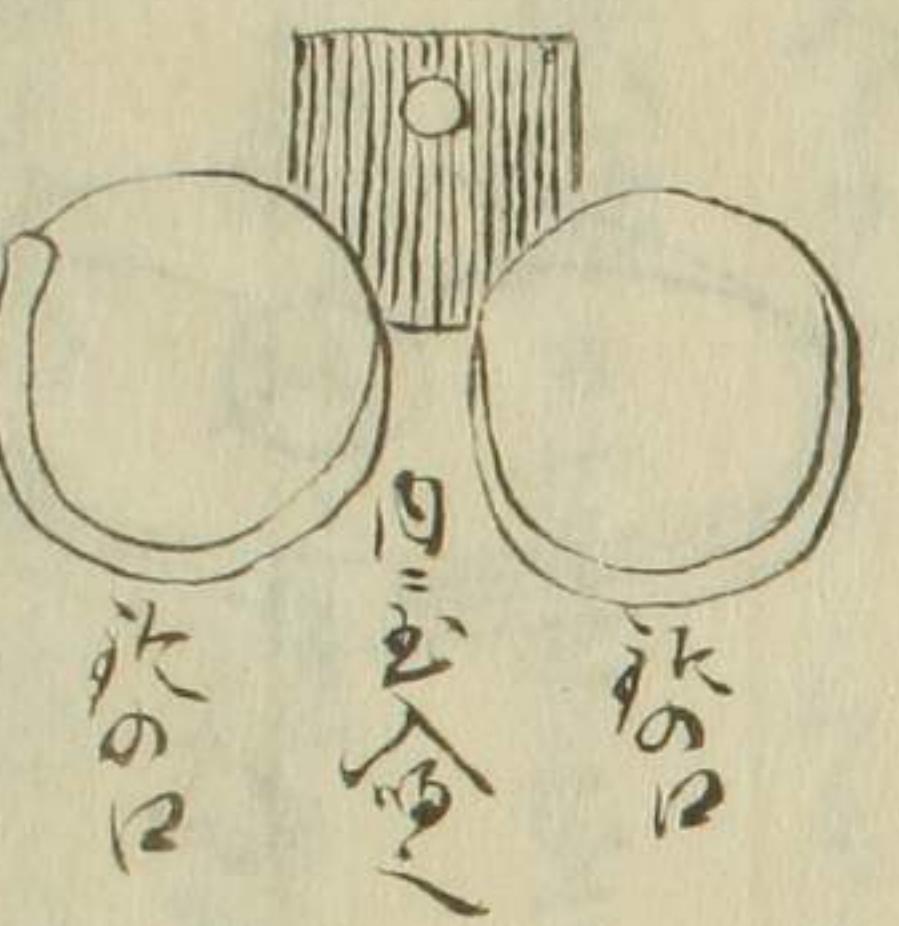
本書

まくあすへと下す處と云
ゆべほぢき

一之三 桜の駿路

あれハ桜三り立ひ蓋お
れ六色も蓋立え
あれハ夜扇の旅と云
此のふく扇の宿せよ
うちの旅と並行つ
とちく

又二川路の汎路も有



桜口

白木口

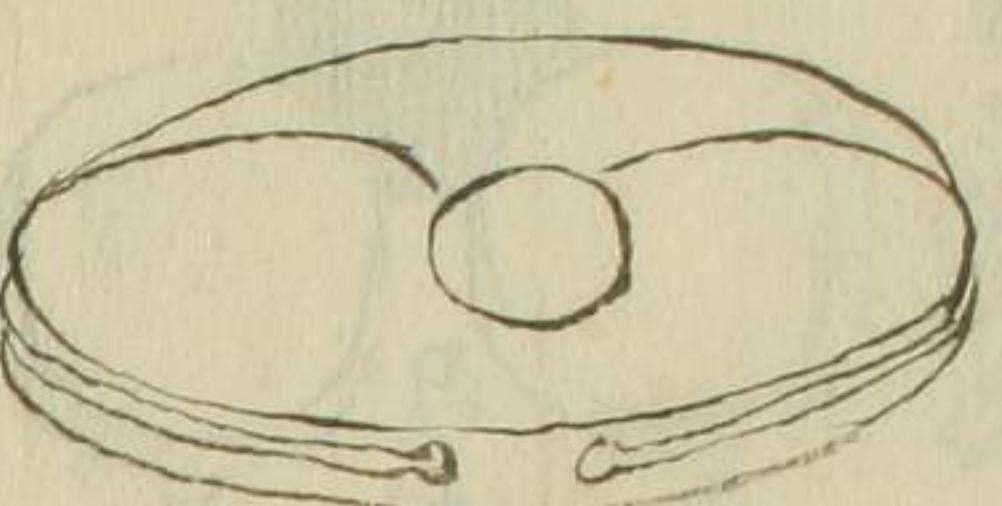
桜口

あれをゆかまくお歌あく
着蓋章とてハ紺引の元
みほくとてくゆく生
ゆくハおれとて是不宣
生と有ねの旅

はすよ足せむとほく
みてしては不と
まうすの金障
もれぬの

一せよまタモ、駄踏

下井戸正三



次の口

此れ六枚多又有ねこ多々
更衣金りとくからう
今も又ハ尾表の形ちよ
似て西中 小ぬき穴有杏
貝の口の末味りと下
よ中種もひつらと内立
右ゆすを入てゆ

二一洋小澤路の口夜山と歸ると仰りハ
け放路の口ゆかへ一臺東退治の後又行
えよかへゆかへ行のわたらふむ智
一放路のさよ金のくらぐくらす初めに御家
のがめ、内書き方と立ち方と内書き方と
立ち方と立ち方と二口吹ハ二口と立ち
かくらの取り組み内書き方と内書き方
ウチモテ不吉

右放路のくらぐくらすのやうも金のくらす

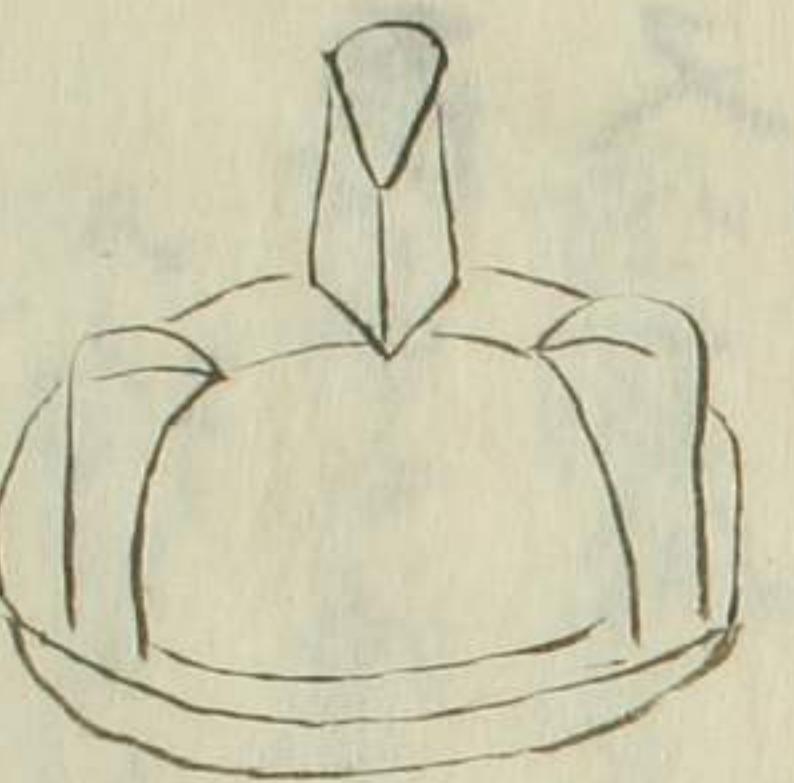
り事へて爲すを爲す無能も自己もあま
舍人めぐらし主方とては六種全一用へ
なりゆきすしてしまふくわにま違なぐら
往詮のくわよ御隊は御法ねりと宣
むけままで行かゆきの入荷りづくハ
常くらまきのりる本のせま車

一 隠家の蓋車

但て車を挂架のゆき車と申す又廻
ましく挂架もいたいとかくもさす
極ふ車をする蓋車のゆき車ともす
名不宣

又庸利流より二人旅の蓋車と聞か
れ立車といつてモ主ひ蓋車と載て六
よ／所を載れる（荷物の量を車より
多く一車りうる）其後の又曰くし

スリスリと風の音をとつて又他の音
並と打てて一蓋を主、形は掌子似た
うながすがさういふとれ古の名前
の風や又は風かまきとがくわかな門
流多々くじふそれもうよす重
英学の音、外のうわ家の悦といり
はくわうて不宜り



大小方角の主と用ひて済
いもの古わと用ひても一箇
やまと共に窓とてねむ
自立くまぐり入、透度又は
の時もひい蓋をもてて
かはれぬ物食事味りり
不宣の音をもててゆき
ねよからずりは二つ房の肩
ハ二行（入筋事）

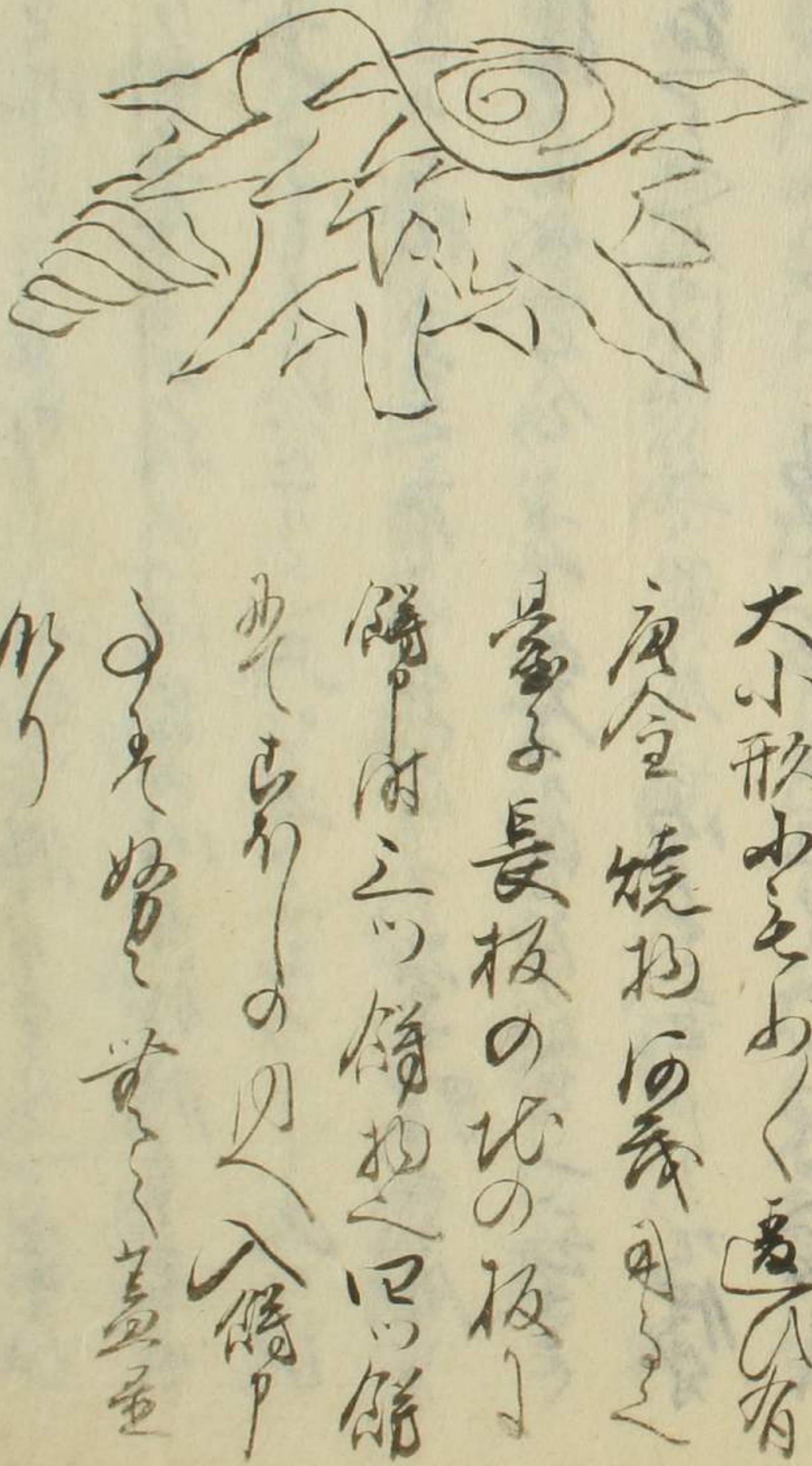
右の外の物よりは、此を過ルとは、
一ト入り附き此の下馬と云ふ事
入先は常ヒ市場ノリ、此處の酒の量
の詰アリハ又モ印必用

一 隠岐の酒の量を考へ、夜の比之板
又ハ正筋又筋又、正の日量を考
モハよ御釣りハ等とせむるを、酒
の量至ハ凡二リと前メシテ
但ニツカムニリと前モ申すが如

の量至ハ一トハ、前二リと前モ申
事至る酒の量取リ候ハ、此量と前モ
考アレハ、酒の量アリ、又凡二リと前
モ申すが如前モ申すが如前モ申すが如
一トアリのケドリ、其量を取リ候ハ、
アリ、酒量至ハ又量至ハ、と題ス
凡アリ、其ハ、酒の量と申すが
是モ申すがニリと前モ申すが如

カタリ我と右をせりて右を左にせしる
前の裡金一圓ノ右を左一打左にて先
きうち左方を右にほてばの金ノ裡金一
圓ノ左を右一右を左にせしるをも
なべ六毛一左を右にせしるをも
えびほり腰ちよれて左を右にて左を
まよふ事一これ脇の三毛一左を右の
手を左にせしるを金ノ左を右にて左を

一茶螺の蓋面



一茶螺の蓋面ハ馬子長板の花

傍入又は竈前至廻部下馬す時半端の處
と腰のひもを下へて腰より上へまし
ウナ着るを後め風呂の間をか陽子を生む
玉子を身に含みて又は身をあらへスハ見
その内宿の主たるふ事無く半裸の處と
腰より上主んとも思角げにて之く
角と大角とも言ふゆきと半身の腰骨
リリと下主んゆきと左の腰骨にて之く
之を切てくつて左腰骨にて之く

ト原ノ原ノ主をちよかたの腰の際よりは
主の腰の際よりはきだり腰を下す事無
うなまなま室屋をもとの腰をもとの柄
の腰よりは小室屋をもとの腰をもとの柄
ト原ノ原ノ主をちよかたの腰の際よりは
之を切てくつて左腰骨にて之く

一章

仰面氣をもつてまわのとしの腰を引
クアヒ上仰せりおでりまづひ
之をもの其下向そハ筋の行きまづひ

タカハシ

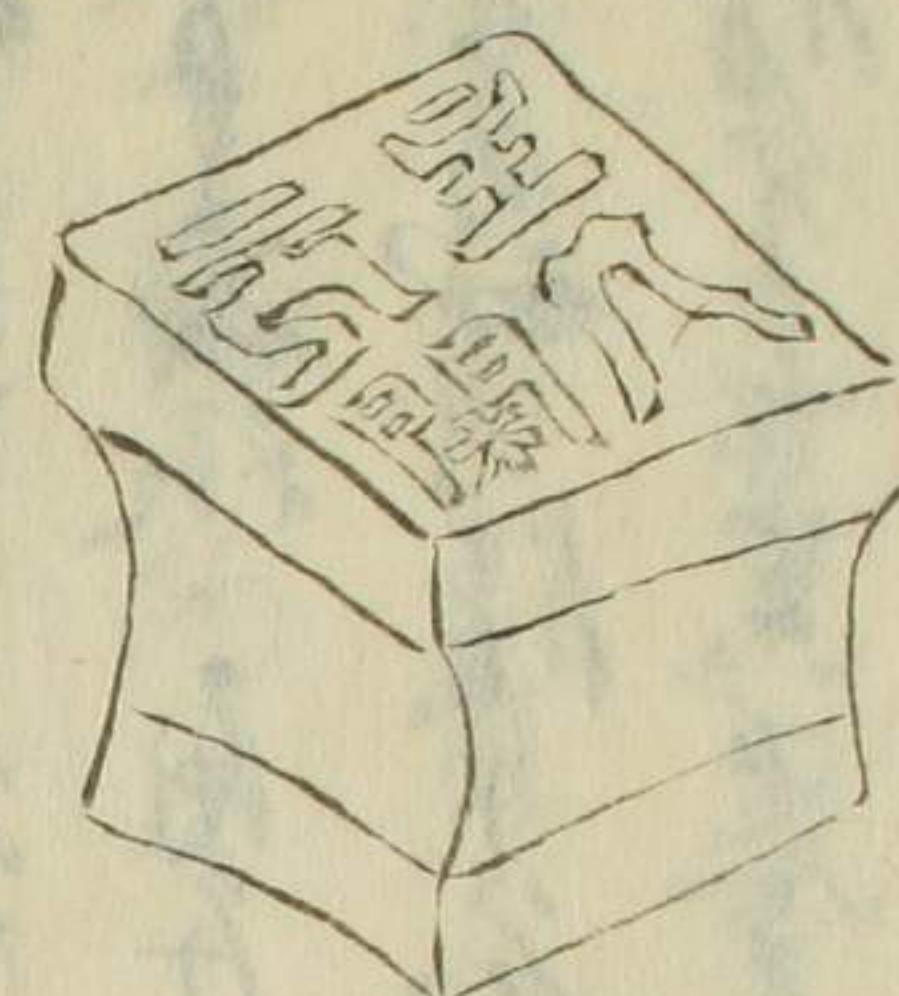
一
まわる高きはすけむせうの竹
もとまつてあゆの川へりても多く
すくはまく、宝かくとよそひ生の舍^{大年}
、西風のこゑの舍^の、各の多^人、也^を居^か
解りぬ乍^もえいへり、されば賄金人
益古^トしよれ、生の舍^をてた何^をも得^ず
のほれ、那^ははゆき、仕事^をあ



小方取^ひからす有^す度合
後わら^の裏^{おもて}見^え不^見
法^と蓋^{ふた}の^と文^字
わよえらかの蓋^{ふた}の事^よ
おしゆひま^ま、高^{たか}も夜^よ
比^ひの枝^え、傾^{かたむ}てつ傾^{かたむ}て
筋^{すじ}をこすの更^う入^る曾^も

一葉の蓋^{ふた}、高^{たか}も夜^よも候^ま

一印の蓋立



大小有存處有丸角
角有ソラトノ角附
度金度度全號也
度也也用て
又之さく也ゆて居
不宣也附文字の畫と
やひりて度まつて
石印の蓋立處も度の下の極文威相

立形半の立處も大國主の御房も文字
をよそへて又まのひと先に備りて御考
板の勝ニツカシムヨリ二所の内へゆく又
之をしげる多の布立す。者もねど。立
あく付を仰。筋引く。也ゆき。ひか。室
立す。あく。筋の際は立處や事ハ文字の
ひも。立。也。る。立。事。又。ま。の。前。筋。の
よ。筋。下。角。也。て。立。立。立。立。右。ハ。筋。の
け。立。又。筋。下。立。立。立。立。立。前。の。蓋

立まつて角——圓す大目がの三脚もさ
は木太さの上をまくに光るまの前脚の方

少角斜て立てる事

仕立て——下の蓋車と下とが一般
又車と下とで脚と足をサセトモ
多すもあらそひある——と文多きより、下
の清車と足苦み下に入れたまく、先
も、らのよえまわらむと上を房くとも
宜むするのれ事

右七種の車を並べて參合す(物を別て有
り)うちの中車と右の車の内大目が
併りとありて、もと車と用ひふと
如く、と車と用ひふと
車と車と用ひふと

車と車と用ひふと

一ノリ人形の蓋玉

太有立古弓取
有度金度度
以度度也也
度度也也也
仁也文也之也
病也流也也也
蓋也也也也



一ノリ人形の蓋玉者ももの序り言勝也
あれと二行へて又蓋玉この内もね
人形とぞくと並ぶ下に三五方とぞく
多大の前より也

世にり人形とく是る業行の事と人形
只形とて五ハ疊しテトモ人うなむ
レモテトモ人うなむ

五ハ疊シテトモ

一三ツ葉の蓋主

書風

えれハニリカレニトモ
ノ紙本の筆とニシテ
ヨリテノル所ニ至クア
南金手のりもやと傍方
毛筆人三ツノ形内
シテシト墨力とす
タリ

右三ツ葉はかくし三角形の三方又ナ
ト蓋主ノ三ツノ紙とヒニ有る日本事
ニまアヘニ序ノ入房でも不苦

一四ツ葉の蓋主

えれハ外の筆あらヒと云
トシテノ紙主ニシテ
外房方ニシテ御主
ナモ同人筆主ニシテ

有り事もあましに角アリハシム
あり事の蓋をアリヒコモニテアラヘ

一沸ケの蓋

水の沸ケの形状アリ。蓋アリの處と
ややくらやのまきハ檜木の五角形と
主ニシテ一角が初ミハ直角と二角

六角形也

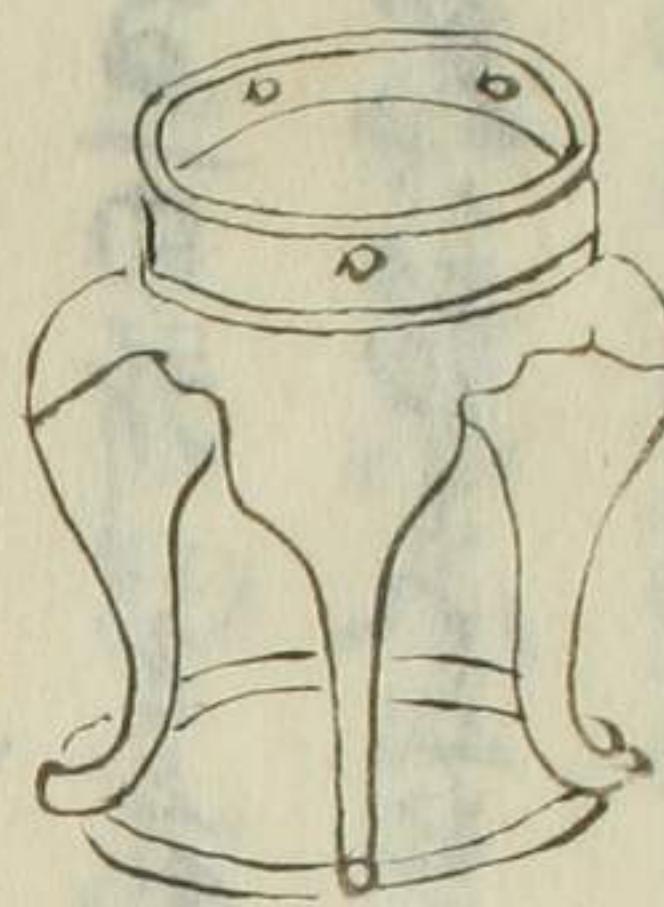
ニリハ入キモカセタ

一鉢の脚アリヒコモニテ蓋

ありハ脚アリの形アリの蓋アリ
多くある。モニ沸ケノ同ニ。蓋アリ
主ニ所アリ。一角四角の
形アリ。主ニ角アリ。角アリ。主ニ
山形アリ。アリ。アリ。アリ。

入信

一夜學の蓋金 仮に某の小金



は放と而形もしよの
たりとも極太滑身大
肩び形とわて造
是れ物の上の火吹と
蓋あよそひく形ハ能
きやせん夜學の蓋

金

石壺の蓋金をとばす有る二り也前
金引て五十九ハシテうと利多
モニルハ所の内す御門の金
之より一九合をうるべ

一巻輪邊の蓋



穴ハ遠列に沿ひ
の候蓋重今ヒ合處
キシカ多ヒ少ヒ
ノハヒヒヒヒヒヒヒ

右丈ヒ輪邊のぬ、金ハ四つヒヨドリテ
枝葉ヒタクヒナヒモヒ蓋庄ハ植一キ

前モ金三引ヒ且扇ハ上の輪邊の紋ヒ蒙
被ヒ立方ヒト波サヒヌヒモヒ波ヒ
モヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒ
ヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒ
ヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒヌヒ

仰ヒモ古蓋也

